

## 待降節第4主日礼拝説教 「あなたが迎え入れるならば」

日本基督教団石神井教会 2016年12月18日

### 【旧約聖書日課】 イザヤ書 7章10～14節

<sup>10</sup>主は更にアハズに向かって言われた。<sup>11</sup>「主なるあなたの神に、しるしを求めよ。深く陰府の方に、あるいは高く天の方に。」

<sup>12</sup>しかし、アハズは言った。「わたしは求めない。主を試すようなことはしない。」

<sup>13</sup>イザヤは言った。

「ダビデの家よ聞け。あなたたちは人間に、もどかしい思いをさせるだけでは足りずわたしの神にも、もどかしい思いをさせるのか。

<sup>14</sup>それゆえ、わたしの主が御自ら、あなたたちにしるしを与えられる。

見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。…」

### 【使徒書日課】 ヨハネの黙示録 11章19節～12章6節

11<sup>19</sup>そして、天にある神の神殿が開かれて、その神殿の中にある契約の箱が見え、稲妻、さまざまな音、雷、地震が起こり、大粒の雹が降った。

12<sup>1</sup>また、天に大きなしるしが現れた。一人の女が身に太陽をまとい、月を足の下にし、頭には十二の星の冠をかぶっていた。<sup>2</sup>女は身ごもっていたが、子を産む痛みと苦しみのため叫んでいた。<sup>3</sup>また、もう一つのしるしが天に現れた。見よ、火のように赤い大きな竜である。これには七つの頭と十本の角があって、その頭に七つの冠をかぶっていた。<sup>4</sup>竜の尾は、天の星の三分の一を掃き寄せて、地上に投げつけた。そして、竜は子を産もうとしている女の前に立ちはだかり、産んだら、その子を食べてしまおうとしていた。<sup>5</sup>女は男の子を産んだ。この子は、鉄の杖ですべての国民を治めることになっていた。子は神のもとへ、その玉座へ引き上げられた。<sup>6</sup>女は荒野へ逃げ込んだ。そこには、この女が千二百六十日の間養われるように、神の用意された場所があった。

### 【福音書日課】 マタイによる福音書 1章18～23節

<sup>18</sup>イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。<sup>19</sup>夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。<sup>20</sup>このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。<sup>21</sup>マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」<sup>22</sup>このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

<sup>23</sup>「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」

この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。

## 備えの祈り

アドヴェント（待降節）の四本目のロウソクを、静かに点して、この日の礼拝を迎えました。クリスマスの祝いのときを迎える前に、アドヴェントの祈りを、今暫く、過ごすことが許されています。

ある方から「アドヴェントのロウソクの四本目が灯ったらクリスマスを祝うのでは」と聞かれたことがあります。日本の多くの教会の習慣で、クリスマス当日が日曜日にならない限り、直前の日曜日に前倒してクリスマスの祝いの礼拝を行うということをしてきたからでしょう。けれども、アドヴェントの四本のロウソクは、本来、すべてアドヴェントのロウソクです。三本がアドヴェントのロウソクで、四本目はクリスマスのロウソク、というわけではありません。そのような誤解を解くためというわけではありませんが、最近の多くの教会に倣って、今年は、五本目のクリスマスのロウソクを立てることが出来る燭台を、アドヴェント・キャンドルとして用意してきました。五本目の白いロウソクは、クリスマスの祝いの礼拝、クリスマスイブの礼拝から、点すこととなります。

この四本目のロウソクを点して、わたしたちは、アドヴェントの祈りを、もう少し深めるときを与えられました。アドヴェントの期節の色は「紫」です。悔い改めや、神の救いを待望する祈りを指し示す色です。この「紫」の色に導かれて、皆さんは、アドヴェントの祈りを深めてこられたことでしょう。それに加えて、わたしは、この期節に、「教会の交わりから離れてしまっている方のことをおぼえて祈ってほしい」とお願いしてきました。クリスマスに、皆さんは、ご自分の家族や友人を教会のお招きくださるかもしれません。クリスマスには、久しぶりの方が来てくださることもあるでしょう。そのことを憶えて祈ってくださることを、さらに広げて、教会の交わりから離れてしまわれている方が交わりを回復して、礼拝の生活を取り戻していただけるようにと、祈っていただきたいのです。

この期節に、たくさんの方が、クリスマスの献げものとあわせてお便りをくださっています。その中の一つを読ませていただいて、わたしは今、実は、とても心穏やかでいられなくなっておるのです。もうすでに五十年以上、この教会に名を連ねてくださっている方ですが、ご自宅が遠くになられてからなかなか礼拝に行けず、長年、せめてクリスマス礼拝には出席しようとしてこられたというのです。ところが、その方は、一年に一度の思いでクリスマス礼拝に来て、何十年も声を掛けてもらえることもなく、交わりに迎え入れてもらうこともなかった、とおっしゃる。そして、お便りには、この機会に教会を脱会させてもらいたい、と綴られていた。

これは、その方お一人のことではないと思います。わたしたちの教会の有り様が問われている。わたしたち教会が、どのようにクリスマスを迎えているのかが、問われている。いいえ、わたしたち教会が、本当にクリスマスを迎える教会となっているのかが、問われている。そう思いました。皆さんを責めているわけではありません。そのお便りをくださった方は、わたしたちに、クリスマスを迎える備えの祈りを促す、アドヴェントの天使として遣わされてこられたのです。

## 迎え入れる

今日の福音書は、アドヴェントの物語。正しい人ヨセフが、結婚前に身ごもった婚約者マリアを迎え入れるかどうか悩んだあげく、夢の中で天使の告げる言葉を聴いて励まされて、結局、マリアを妻として迎え入れました。

ヨセフがこのとき、一度はマリアと縁を切ろうと決心したのに、その決心を翻してマリアを迎え入れることになって、本当によかったでしょう。そうしなければ、クリスマスは無かったのです。ヨセフがクリスマスを迎えられなかっただけでなく、わたしたちもクリスマスを迎えることはなかったでしょう。ヨセフに捨てられたマリアが、一人シングルマザーとして御子を育てました、というストーリーでは、決して本当の意味でクリスマスにはならなかったはずです。少なくとも、わたしたちの聞く福音書は、ことにマタイ福音書は、ヨセフがマリアを迎え入れることがどうしても必要なことだった、それがクリスマスの出来事だったと、そうはっきりと告げているのです。

わたしは、自分が短気で頑固な割には決心が揺らぎやすい優柔不断な人間だと思っていますが、皆さんの中には、ひとたび決心したら揺らぐことのない堅い意志の持ち主もいらっしゃるでしょう。ヨセフは、優柔不断だったわけではないと思うのです。むしろ、福音書は、ヨセフが堅い意志をもって決心をしたということ、はっきり言わんとしている。そのヨセフの決心が、翻ったのです。夢で天使のお告げを聞いただけで、です。

ヨセフは、正しい人でした。少なくとも福音書は、そう紹介しています。正しい人だったので、一緒になる前に身ごもっていることが明らかになったマリアのことを、表ざたにするのを望みませんでした。マリアが、人々の前で晒し者にされることを良しとしなかったのです。注意して読んでいただきたいのですが、ヨセフは正しい人だったから結婚前に身ごもったマリアと縁を切ろうとした、というのではないのです。ヨセフが正しい人として考えたのは、マリアが人々の前で晒し者にされ、罰を与えられるようなことになってはいけない、ということでした。そうであれば、ヨセフは、黙ってマリアを迎え入れて、全部自分の責任であると言うこともできたのです。白い目で見られることはあっても、そうすれば、マリアが晒し者にされ、罰せられることはないはずでした。

ところが、にもかかわらず、ヨセフは、ひそかに縁を切ろうとしたのです。ヨセフは、思い悩んでいたのでしょう。正しい人として何をなすべきか、ということと、一人の人を妻として迎え入れる一人の人間としての感情の間に、深い葛藤が生じていたのでしょう。この深い葛藤の結果、ヨセフが出した結論が、ひそかに縁を切ることでした。公に離縁状を出すのではなく、黙って妻として迎え入れるのでもなく、ひそかに関わりを断つこと。もしかすると、ヨセフは、一人遠い地に離れて行ってしまおうと考えていたのかもしれない。そうすることで、人々がヨセフの無責任を問うことがあっても、マリアに責任を問うことがなくなると考えたかのもかもしれない。

けれども、そのように関係を断つ決心は、翻されることになったのです。

## インマヌエルのクリスマス

ヨセフの決心は、なぜ翻ったのでしょうか。なぜ、マリアとの関係を断つ決心をしたのに、そのマリアを迎え入れることにしたのでしょうか。

神が、クリスマスのご計画を始められたからです。ヨセフにクリスマスを迎えさせることを、神がお決めになられたからです。

わたしは、ヨセフが、他の人よりも信仰深かったとは思いません。そうお考えになられていらっしゃる方があれば、それを否定するつもりはありませんが、ヨセフが信仰深かったとは、聖書はどこでも言っていないのです。「正しい人」であったとは言っても、それがそのまま信仰深さ、神への素直な敬虔さにつながるとは限らないでしょう。ですから、ヨセフは、夢で天使のお告げを聞いたので、それを素直に信じた、という単純な信仰話ではないと思います。

むしろ、わたしは、ここで、ヨセフの決心を翻させるために神が起こされた行動にこそ、目を向けるべきだと思います。この福音書の物語は、確かにヨセフがマリアを迎え入れるかどうか思い悩んだ話なのですが、実は、それ以上に、神がヨセフに積極的に働きかけになられて、どうかして彼がマリアを迎え入れられるようにと、そして、彼が御子イエスを受け入れられるようにと、必死になってくださった話なのだと考えられないでしょうか。神は、どうしても、ヨセフの決心をひっくり返さないわけにはいかなかったのです。ヨセフがマリアを迎え入れ、クリスマスの出来事の初穂となるために。

ヨセフは、クリスマスを迎えるために、まず、マリアを迎え入れました。クリスマスの御子は、マリアの内に宿っていたからです。マリアを迎え入れることなしに、ヨセフは、御子を迎え、クリスマスを迎えることはなかったのです。

それは、マリアの方も、同じだったのではないのでしょうか。このヨセフを、マリアは受け入れました。自分に対して複雑な思いを抱いているかもしれないヨセフを、マリアも受け入れました。そして、ヨセフを受け入れることによって、マリアは、自分の内に宿った子を、御子として生み、クリスマスを迎えたのです。

クリスマスを迎える備えの祈り続けるわたしたちに、御言葉は、「その名はインマヌエルと呼ばれる」と語りかけています。「この名は、神は我々と共におられるという意味である」と告げています。クリスマスに、わたしたちは、このインマヌエルの誕生を、見るようにされるのです。神は、クリスマスに、わたしたちがこのインマヌエルの誕生を見ることができるようにと、あらゆる手を尽くして、わたしたち一人ひとりに臨んでくださっているのです。

クリスマスに、わたしたちが祝う神の御子は、インマヌエル。「我々」「わたしたち」と共にいらっしゃる神です。わたし一人とではなく、わたしとあの人をつなぐ神として、共にいてくださる神です。

神は、ヨセフに夢を見させられました。マリアを迎え入れるようにと、ヨセフの決心を変えさせるために、です。アドヴェントの祈りのときに、神は、わたしたちにも、夢をお見せになられるでしょう。あなたのマリアを迎え入れるように、と。クリスマスの御子を宿した、あなたのマリアを迎え入れなさい、